



photo: Kuniya Oyamada

THE WAY I HEAR, Lake Towada 2013 「湖とその遊覧船のためのコンポジション」

遊覧船、船内アナウンス(音声と音楽)、テキスト・プログラムを用いたツアー・パフォーマンス(約1時間)
「十和田奥入瀬芸術祭」、青森 2013.9.21-11.24

日本で3番目に大きなカルデラ湖である十和田湖を巡る約1時間の遊覧／コンポジション。十和田湖・西湖の休屋港を出港し、遠く東湖を望みつつ、中湖の奥で切りかえし、再び西湖に戻る遊覧の大部分は静寂とその時々の湖の景色からなる。

乗客／リスナーは景色と対峙しつつ、船内アナウンスを通じて時折語られるナレーション、乗船時に手渡されるプログラムに書かれた短い文章という2種類のテキストによってナビゲートされる。あらかじめ決められたロケーションで再生されるナレーション、プログラムのテキストは、十和田湖周辺で行ったリスニングリサーチや地域史、伝承、地元の漁師、ガイド、気象学者などへのインタビューなどを経て書かれ、十和田湖や周辺の過去-現在のサウンドスケープに触れる。

コンポジションの構成要素としては、遊覧船のエンジン音も重要な音源として扱われた。エンジン・スピードの上げ下げによって生まれる音のダイナミクスや、風景の移り変わり、またクラッチ・ミュートによってエンジン音を極力無くし船が湖上に漂う状態を作る等、操縦技術を組み合わせつつ、テキストと風景を紹介するタイミングとその時の音場を意図した。他には乗務員によるマイク・アナウンス、汽笛もコンポジションを構成する音源として用いられ、全行程を1時間にするルートとそのオペレーションは遊覧船の船長、乗務員達とのコラボレーションにより作成した。

プログラムの最後のページには「湖上の静寂」と題した他よりも長い文章がシールによって封されており、下船後に湖の周囲で読む様に最後のアナウンスによって案内される。鑑賞者はテキスト読了後、十和田湖を離れる前に、遊覧船のチケット・カウンターに用意された記念スタンプを押してコンポジションを終了させる。

特別遊覧船は芸術祭期間中17回運航され、423人が乗船した。

詳細: http://www.afewnotes.com/TWIH_Towada2013_cmpstn_jp.html





<アナウンス1 /船: 航行中 / エンジン音: アナウンスの最後でギアチェンジ、大きな音に変わる>

「私が6月にここ十和田湖を訪れた際には、ハルゼミが鳴っていました。
船着き場あたりでもイワツバメがすばしっこく飛んでいて、頻繁に鳴き交わしていました。

今日はどんな様子ですか?
天気はどうですか? 風は?

湖畔からは何か聴こえますか?
人の声 車やバスの音?

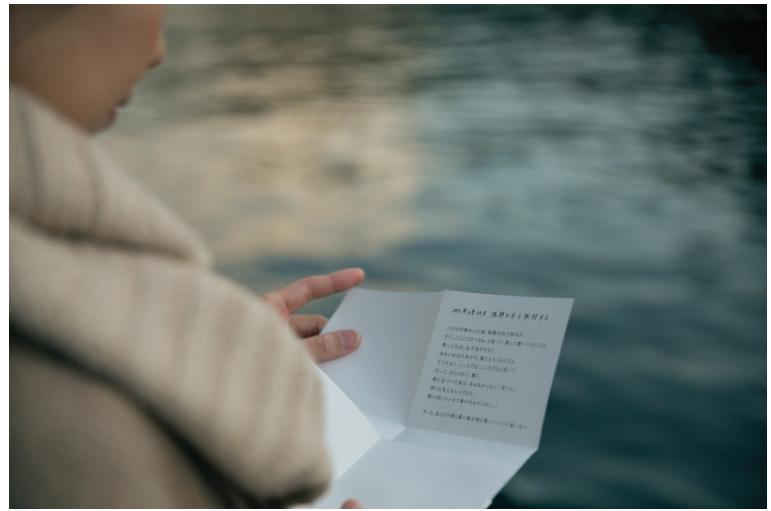
鳥の鳴き声

船の中は?
船のエンジンの振動

そのエンジンにギアが入り、一段と大きな音がする

船の後方でモーターが水しぶきをあげる

アナウンスの声はかき消され、遊覧がはじまる」



<プログラム2ページ目 / 船: ゆっくりと滑るように動く / エンジン音: 最小>

2013年6月26日 漁師の方を取材する

「GPSが無かった頃、朝霧が出た時はさ、さて、ここどこだべなあ、と思って、黙って聴いてるんだよ。黙つてれば、必ず鳥がさわぐあるいは川の音がさ、聴こえてくるんだよ。そうすると、こっちだな、こっちだなと思って行って、またとめて、聴く。陸に近づいた時は、ああ良かったって思うよ。何にも見えないんだもん、朝10時くらいまで霧が出るからねえ。」

きっと、あの日の朝も濃い霧が湖を覆っていたに違いない。



<アナウンス2 / 船: 停止又は浮遊 / エンジン音: 無し又は最小>

1100年前のあの日、8月にしては肌寒く、東風が強くふいていた。

915年8月17日

低い地鳴りが聞こえる、と同時に、突然、凄まじい爆発音、轟音とともに、目の前で、噴煙が空高く吹き上がるバラバラバラっと大量の石や灰が降り注ぐ火碎流が、猛スピードで山を越えて行く音も立てず、風に押されて、西へ、西へと

えぐった様に開かれた火口の奥底に、言い知れぬ沈黙が沈みこみ、深い静寂と青い水がその上を覆った。

<1分30秒以上の空白の後、汽笛を3秒以上鳴らし、エンジンを始動>